

教会の生きた交わり (2)

—キリスト者同志に対する態度の勧め—

【聖書箇所】 12章 9～21節

はじめに

●前回は、教会における真の交わりの必要条件について学びました。その必要条件を一言で言うなら、「謙遜であれ」ということです。「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、慎み深い考え方をしなさい。」とあるように、もし自分自身を過大評価するなら、必ず、交わりが乱されまです。ですから、自分自身を正しく評価しなければなりません。また教会がひとつのからだだということを正しく理解すること。そして、自分に与えられた賜物を正しく理解し、それを主にささげて仕えていくということでした。教会における真の交わりにおいて、謙遜がいかに大切かを学びました。

●今回は、9節から同じタイトルで、教会の真の交わりにおいてもうひとつの大切な必要条件についてふれたいと思います。その必要条件とは何でしょうか。それは「愛」です。9節からのパウロの勧めはクリスチャンに対して語られています。どのような宗教にも、またどのような社会においても、人間のあるべき理想的な状態を示すための道徳が存在します。そこでは、人間の中に少しでも残っている良いものが成長してくるようになることをと願っています。しかし、その努力はみなみじめな結果に終わってしまいます。聖書はこれと全く違ったことを私たちに示しています。聖書によれば、人間の中には何一つとして良いものがないために、神は私たちをキリストと共に十字架につけられました。そして、イエシュアのみがえりの新しい命にあずかる者としてくださいました。キリストと結びついて、新しいいのちにあずかった者だけが、12章で書かれているような歩みをする事ができるのです。神は、私たちに不可能なことを要求されることはありません。

●旧約聖書で、神の民について次のように記されています。

【新改訳改訂第3版】詩篇 80 篇 8～9 節

8 あなたは、エジプトから、ぶどうの木を携え出し、国々を追い出して、それを植えられました。

9 あなたがそのために、地を切り開かれたので、ぶどうの木は深く根を張り、地にはびこりました。

●ここで「ぶどうの木」とはイスラエルの民のことです。神が彼らをエジプトから携え出して、ご自身の国に植えようとされた目的は、彼らが他の国民のために実を結び、また彼らによって全世界の民が祝福されるためでした。しかし、期待されたぶどうの木は甘い実を結ぶことができませんでした。神は最善を尽くされましたが、彼らに裏切られたかたちです(イザヤ書 5 章参照)。しかし神は、御子を遣わされました。その御子が「わたしはまことのぶどうの木です。」と言われ、イエシュアの弟子たちをそのぶどうの木の枝としてくださったのです。私たち異邦人クリスチャンはそのぶどうの木に接ぎ木されることで、実を結ばせようとしてくださったのです。ですから、イエシュアから離れて私たちは何もすることはできないし、何の実も結ぶことはできないのです。

●肉からは、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術(まじない)、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、妬み、遊興など・・・、こうしたものしか出てきません。

●9～21 節において勧められている共通項は、9 節に記されているように、「愛には偽りがあってはなりません。」とあるように、「偽りなき愛」です。その愛の現われとして、悪を憎むこと、兄弟に対して尊敬の心を持つこと、また日々勤勉であること、患難の中でも兄弟姉妹たちの必要に目を向けること、またへりくだって互いに一つ心となること、また人との平和を保つこと、・・・など、いくつかの項目が記されています。いずれも、一つひとつ取り上げる価値のあるお勧めです。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 12 章 9～21 節

- 9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。
- 10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。
- 11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。
- 12 望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。
- 13 聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。
- 14 あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。
- 15 喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。
- 16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえて身分の低い者に順応しなさい。
自分こそ知者だなどと思っははいけません。
- 17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。
- 18 あなたがたは、自分に關する限り、すべての人と平和を保ちなさい。
- 19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。
「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」
- 20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。
そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。
- 21 悪に負けてはいけません。かえて、善をもって悪に打ち勝ちなさい。

●昨年、祈祷会でこの箇所から、自分にとって一番心に響くことばをそれぞれ選んでもらい、その理由をお聞きし、そのために祈り合うということをしました。それぞれの祈りの課題は以下のようでした。

- A 兄弟は、6 節から「自分に与えられている賜物を知ることができるように」。
- B 姉妹は、11 節から「いつも怠けることなく、霊に燃やされて、主に仕えることができるように」。
- C 姉妹は、8 節から「自分になされた主の恵みをいつも大胆に人にあかしすることができるように」。
- D 姉妹は、12 節から「いつでも主にあって喜んでいられるように」。
- E 姉妹は、同じく 12 節から「いつも主にあって喜び、また祈る力が与えられるように」。
- F 姉妹は、12 節で「どんな時にも、いつも主にあって喜んでいられるように」。
- G 姉妹も、12 節。
- H 兄弟は、21 節から「人からどんなことを言われたり、されたりしたとしても、負けないように」。

というものでした。そこで、ここでは最も多かった 12 節を取り上げてみたいと思います。12 節から三つのことを取りあげます。

12 望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。

1. 将来を見つめることの必要性(神のご計画のうちにあることを知る)

●12 節にまず「望みを抱いて喜び」とあります。望みを抱く、すばらしいことです。かつての札幌農学校(現在の北大)で、クラーク博士が学生に残した言葉として知られる有名なことばに「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(青年よ、大志を抱け)があります。この後に、「イン・クライスト」(キリストにあつて)ということばが続いていたとかいないとか、真実は知りませんが、いずれにしても、私たちはキリストにあつて望みを抱く生き方が可能です。

●私たちが新しく生まれたことによって、神は私たちに**生ける望み**を持つようになさりました。その生きる望みとは、「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」です。やがて時が来れば、私たちはその全貌を得ることになるのです。

●ローマ書 10 章 33 節に「彼(イエシュア)に信頼する者は、失望させられることがない。」とあります。他の聖書では「失望に終わらない」とあります。私たちの人生の中で失望することはあります。しかし、主に信頼する者は、決して失望に終わることがないのです。主こそ私たちの望みです。なぜなら主は、私の人生をすべて主権をもって治め、導くことのできる方だからです。主が私とともにおられ、私の味方として、すべてのことを相働かせて、益としてくださる方だからです。ですから、私たちは失望しないのです。

●神は私たち一人ひとりに対してご計画を持っておられます。そのご計画とは、「わざわざではなく、平安を与えるものであり、私たちに将来と希望を与えるための計画」です。ちなみに、この主の約束は、直接的には、バビロンの捕囚となるユダの民たちに対して語られたものです。その原則はすべて主にある者たちにも当てはまると信じます。それゆえ、失敗の中にも、失望の中にも、希望があることを知らされるのです。どんな患難の中にあつても、主は私を決して見捨てることはしないという確固たる確信が与えられるのです。主はその永遠の御腕をもって私たちを支えていてくださるのです。

●苦難とか、患難というのは、私たちを弱めるどころか、むしろ私たちを強めるために備えられた主の訓練なのです。もし私たちがいつも見えるもののみ目を留めているならば、私たちは絶望し、追い詰められて八方塞がりの状態になってしまうはずですが。しかしそのときに、自分に対する神のご計画が与えられていることを、信仰をもって望み見ることができれば、私たちがその望みによって喜ぶことができるようになるのです。そしてこれが他の兄弟姉妹たちに大きな励ましを与えるのだと信じます。また、これが「偽りのない愛」につながると信じます。なぜなら、絵に書いた餅ではなく、現実を経験したことに基づく本物の喜びだからです。それが他の人に伝わるのです。

●神の御子イエシュアは苦しみの十字架の上で、最後にこう言って息を引き取られました。「完了した」と。そのことばは、イザヤがかつて「彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する」(イザヤ 53:11)と預言したように、その苦しみによって、多くの人々が神の平安(シャーローム)を経験できるようになったからです。雨や嵐も必ず過ぎ去って、その後には必ず晴れ晴れとした日が来るように、患難も苦しみも必ず過ぎ行きます。私たちはいつも望みを抱いて喜ぶ者となりましょう。

2. 主を見上げることの必要性

●神の愛を知り、神を信じながら、不安と悲しみで押しつぶされることのないために、私たちは第二のこととして、主を見上げ、主に目を留めることが必要です。これは「祈る」ことに他なりません。12節の続きには、「絶えず祈りに励みなさい」とあります。この勧めは、自分の事だけでなく、他の兄弟姉妹のためのとりなしの祈りも含まれると思います(エペソ 6:18 参照)。

●祈りによって、正しい導きが与えられます。また必要な力が与えられます。祈りなしに私たちは何も成し遂げることはできません。肉の思いを遂げることができたとしても、神のみこころを行なうことはできません。祈りの中で主との交わりを持つことによって、私たちの心はさまざまな混乱から解放され、多くの問題も全く違って見えるようになるかも知れません。

【新改訳改訂第3版】ピリピ人への手紙 4章 6~7節

6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

【新改訳改訂第3版】詩篇 50篇 15節

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

3. 聖徒に目を向けることの必要性

●しばしば自分の問題でいっぱいな人は心の余裕がありません。ですから、人のためにとりなして祈るといふことができなくなります。「人のためにとりなして祈るといふことは、余裕のある人のすることであつて、問題の渦中にある私にはできるわけがない」という一種の決めつけが心の中にあるかもしれません。ところが真実は逆なのです。自分の問題もさることながら、他の聖徒たちの問題をとりなすことによって、自分が解放されることがあるのです。他の人のために目を向けることによって、自分の問題の解決の鍵が見えて来ることがあるのです。教会の働き、主にあるすべての働き、その必要のために心を用い、受けるよりも与えることを喜びとする者となりましょう。イエシュアがそうであられたように。

1995.5.28